

日本語は美味しい

鹿兒島県鹿兒島市

石田 智恵子 (73)

一杯のコーヒーの味も、一言の日本語で変わるものだ。

定年後、夫と二人、マイニチサンデーの日々を過ごしている。初めはぎこちなかったが、それにも慣れ、同じ部屋にいても気にならなくなった。

三食きちんと食事をとること、規則正しい生活をする心がけようと決心して第二の人生をスタートした。ある日気付いた。二人とも仕事に行かなくなったのだから、家事を分担してもいいのだと。食事作りを当番制にしようと提案した。ところがどっこい、

「僕は作れないのだ。だから作らない」

と夫はにべもなく言う。提案が遅すぎた。鉄は熱いうちに打てと言うではないか。

今さら仕方がない。すぐ諦めた。

もう一つ、習慣になっていることがある。三時のコーヒータイムだ。時間にな

ると、私はコーヒーを淹れ、「お茶よ」と呼びかける。一日の至福の時間を大切にしようとの心がけた。これを何とかできないものだろうか。そう考えを巡らせているとき、

「コーヒーでも淹れるか」

という言葉が聞こえてきた。よく考えてみると、主語が分からない。誰が淹れるということか？

「そうね、ありがとう」

とだけ答えて、私は友達への長い手紙を書き続けた。そのうちしびれを切らしたのか、

「コーヒーでも淹れるか」

と語尾を下げ、トーンの低い言葉が聞こえてきた。しばらくすると、香り立つ一杯のコーヒーが目の前に現れた。

「あらー、コーヒーが出てきた。ありがとう」

と感謝し、会心の笑みを浮かべながらその一杯をすすった。美味しい！

勝利の一杯はいつもより甘く香りが高かった。明日はどんな味のコーヒーを飲もうかしら。